

1. 定正院

- (1) 鶯巣の定正院の概要紹介
- (2) 定正院のローカルな話題
- (3) 上杉 定正と定正院
- (4) アオキとヒメアオキの話
- (5) 参道石段と本堂
- (6) 定正院の桜、四景

2. 定正院近くの東大新江用水碑

- (1) 用水の概要
- (2) 東新渠紀功碑（東大新江紀功碑）
- (3) 紀功碑の訓読全文 略

参考 石彫の道の図

- (1) 釜沢の「石彫の道」
- (2) 「復元・石工の道」と悠久山の「石工の道」

1. 定正院

(1) 鷺巣の定正院の概要

定正院は、摂田屋の辻地蔵から「左は山」の道をそのまま村松方面に進んで、横枕のお福酒造の先、左の脇道を百段近く階段を登ったところにある、曹洞宗の古刹です。神社、そして石の庚申塔などを見ながら石段を登り切って、ようやく本堂が目に入ってくるという、まさに「葷酒山門に入るを許さず」という禅寺のたたずまいを、そのまま残している境内です。

鎌倉の関東管領山内上杉家の分家・扇谷家当主であった上杉定正、その家臣が戦いに敗れた定正の遺髪を奉じ、この地に草庵を作ったのが始めとされるお寺です。定正院の山側にはブナ林があり、細い道が通っています。その昔、鷺ノ巣城は、定正院 境内と墓地一帯に築かれていたそうですが、その細道の内側が鷺の巣城とすれば なかなか大きな城郭だったようです。

(直径300メートルほどです。)

本堂の左に、見上げるような高さの墓所があり、機那サフラン酒本舗の吉澤仁太郎が建造したという、吉澤家のお墓です。中越地震のとき、定正院の墓地も大きな被害を受けました。吉澤家の墓所も甚大な被害を受けましたが、その修復を示す、現当主名の銘板も見ることができます。

以前は、長岡屈指の美しい広大な日本庭園が公開されていましたが、その後の長い年月、豪雪や風雨で荒れはてたためでしょうか、最近は公開が中断されたままです。しかし近年、住職の方丈様が交替され、再び整備の手が入るようになり、裏手から拝見しますと、年々その美しさを取り戻しつつあるように感じています。しかし方丈様の頑張りを知っていますので、美しい苔を踏んではならないと思い、大勢での見学は申し訳なく、厳禁とせざるを得ない感じです。

いつの日か、限定公開が始まることを期待しています。

(2) 定正院のローカルな話題 ～ガイドでは、こちらを話しています。

個人的な話になりますが、ここは、私の亡くなった母の実家の菩提寺であり、物ごころについてから今まで毎年、お盆には必ずお参りしています。以前の様子をお話します。

1950年代の後半には、毎年の5月初めに「大般若」と呼ばれていた大きな法要を、祖母に連れられて、見物していました。正式には「大般若会」ですが、それに合わせて、屋台も数軒出店し、まるでお祭りでした。10人くらいのお坊さんが本堂の中をお経を唱えながら（声明）グルグル回り、一人のお坊さんが脇に座って『大般若経』六百巻を転読するのです。子供にとって、あのお経の大きな束が、ぱらぱらぱらぱらっと流れる様子は、手品のようでした。

1960年代の後半、夏は、檀家の子息の受験勉強に、本堂の端を使わせてくださいました。私も、檀家から嫁に出た娘の息子ということで、高3の夏、長町から30分以上かけ、自転車で通いました。その夏は、もう一人、本堂の反対側の隅で勉強する人がいて「自分は新潟大学理学部数学科の4年生で、大学院を受験したい。そのためフランス語を勉強している。」と話してくれました。

当時は、沢田跨線橋ができる前で、溝橋から宮内駅前まで直線の道でした。沢田の踏切が線路と斜めに交叉しているので、徐行では自転車のタイヤが線路の溝に入ってしまうため、自転車で渡るにはコツが必要でした。

1970年代の後半ころまでは、気軽に庭園も拝観できました。ここはサフラン酒の吉澤家の菩提寺のせいかも知れませんが、サフラン酒の庭園同様、石仏や石灯籠が本当に多い庭園です。

庭の奥深くまで拝観できた一番最後は、たぶん1990年代の前半です。明るい雰囲気のお庭だったと記憶しています。

長岡観光と関連する話題としても、いろいろあります。曹洞宗総持寺管主の高僧・新井石禪師、そのお弟子の橋本禪巖師と駒形宇多七さんの縁で、悠久山の堅正寺。そして禪巖師と親交のあった山本五十六の「やって見せ…」の言葉です。更に枡野俊明さん。

まず、サフラン酒の離れにある、大正年間に吉澤仁太郎さんに宛てて詩のお軸「心は大山の如く 八風を受けて動ぜず…」を書いた新井石禪師です。石禪師は、曹洞宗の両本山(西本願寺の京都堀川の本山と東京築地の築地本願寺のようなもの)のひとつである鶴見の総持寺の管主や宗学の最高位に就かれた方です。そのお弟子の橋本禪巖師が、かつて石禪師が方丈を務めた魚沼の雲洞庵で石禪師亡き後に教師として滞在していたとき、新たに建造する寺院を託す僧を探して来訪した駒形宇多七さんに紹介されまして、悠久山の堅正寺に方丈として招かれたのです。

この禪巖師の残してくれた講義録のお蔭で、親交のあった山本五十六の「やって見せ…」の言葉が、今、我々の親しむ五十六語録にあるわけで、ありがたいことです。私は、「語録」は石禪さん、おればこそその遺産と感じています。

鶴見の総持寺が、火災で焼失した石川の輪島から移転したとき、大きな功績があったという、同じく鶴見の建功寺は本山近門寺院として別格の扱いの大寺ですが、その建功寺の現在の方丈の枡野俊明師が、世界的な造園デザイナーとしても知られた方です。新潟県立近代美術館の前庭は、若き日の俊明さんの設計によるものです。

日本庭園以外にも、見どころは多いですが、そのひとつ、初春、本堂までの長い参道の階段の間にある、ヒメアオキの大株の常緑の葉と赤い実は美しいです。春は桜に白いこぶしも見事です。

ヒメアオキについては、別シートに補足しました。ある昆虫とのドラマです。また初春、境内の端から長岡の田園を一望すると、あたり一面、雪どけの霧が立ち込める、幻想的な風景が見られます。山古志の柵池と霧の風景と比べて、こっちが好きとおっしゃる方も、いるのではないかと思っています。長い石段と大きな本堂で知られる定正院ですが、こんなローカルなニュース満載の寺院です。

(3) 上杉 定正と定正院

- 1) 由緒沿革
- 2) 上杉 定正
- 3) 鷺ノ巣城

上杉 定正と定正院

- 1) 由緒沿革



<http://kojyosikyo.main.jp/Nagaoka-C/Saginosu-Jo/Saginosu-Jo.htm>

『明応三年(1494)十月、鎌倉扇谷上杉管領定正、山内上杉顕定と合戦の最中、病死す。遺臣等遺髪を奉じ、越後上杉を頼り当地に至り、草庵を結ぶ。』

春日林泉寺、曇英恵応禪師の直徒可淑和尚巡錫の砌、上杉ゆかりの草庵と聞き上杉謙信の援助を仰ぎ、一寺を建立、定正院殿志賀公大居士と追号し、師、曇英恵応禪師を勧請し開山為す。寺名は開基の院号より名付けたもの。

再三、火災にて焼失、現在の本堂は文政九年(1826)七月四日上棟、建立されたものである。』

「新潟県寺院名鑑」より

2) 上杉 定正

(上杉 定正(うえすぎ さだまさ)は、室町時代の武将、守護大名。相模国守護、扇谷上杉家の当主。上杉持朝の3男。現在の長岡市上条の城主上杉定美の養子となりしが、病弱のため出家し、鷺の巣村に終わるとされているが正史には、この事実はないという。

もうひとつの説として、小金井さんの作成資料にあるような、扇谷家に関する話がある。

一般には『南総里見八犬伝』の影響で扇谷定正の名前で知られている。扇谷上杉家は関東管領上杉氏の一族で、相模守護を務め関東管領を

継承する山内上杉家の分家の存在であった。

明応3年(1494年)、扇谷家重臣・大森氏頼と三浦時高が相次いで死去。同年10月、定正は伊勢宗瑞とともに武藏国高見原に出陣して山内顕定と対陣するが、荒川を渡河しようとした際に落馬して死去。享年49。長岡市にある定正院が菩提所と伝えられている。

山内 顕定=上杉 顕定(うえすぎ あきただ)

越後上杉家の出身で山内上杉家を継ぎ、関東争乱期の40年以上にわたって関東管領を務めた。

山内上杉家(やまのうちうえすぎけ)は、室町時代に関東地方に割拠した上杉氏の諸家のひとつ。足利尊氏・直義兄弟の母方の叔父上杉憲房の子で、上野・越後・伊豆の守護を兼ねた上杉憲顕に始まる家で、鎌倉の山内(鎌倉市山之内、現在でも「管領屋敷」の地名がある)に居館を置いたことに因む。

扇谷家家宰の太田道真・道灌父子は、河越城(埼玉県川越市)、江戸城(東京都千代田区)を築城するなどして、扇谷家の勢力は大いに拡大した。山内家と扇谷家は両上杉家と呼ばれるようになっていた。

定正は山内家主導で進められた和睦などに不満で、定正と山内顕定は合わなくなり、文明18年(1486年)7月26日、定正は、不仲になった扇谷家の家宰・太田道灌を相模糟屋館(神奈川県伊勢原市)に招いて暗殺した。(自分がいなくなれば扇谷上杉家に未来はない)

明応3年(1494年)、扇谷家重臣・大森氏頼と三浦時高が相次いで死去した。同年10月、定正は伊勢宗瑞とともに武藏国高見原に出陣して山内顕定と対陣するが、荒川を渡河しようとした際に落馬して死去。享年49。

長岡市にある定正院が菩提所と伝えられている。

3) 鶯ノ巣城

鶯ノ巣城は、定正院境内と墓地一帯に築かれていた。寺の一帯は南北に伸びる小高い丘陵が浸食谷によって分けられ小規模ながら城を築くのに適した地形となっている。城の遺構などは何も残っていないが、寺が城跡の曲輪(削平地)を利用して建立されたと推定される。

(4) アオキとヒメアオキの話



アオキ(青木)

ガリア科またはアオキ科(Aucubaceae)アオキ属の常緑低木。和名の由来は、常緑で枝も青いため。常緑の高さは2mほどの低木で、枝は太く緑色。葉は対生し、厚く光沢があり、乾くと黒くなる特性。花は3~5月に咲き、褐色または緑色で枝先に穂。

花弁を4枚有し、子房下位、単性花で雌雄異株。果実は卵形の液果で、種子を1個含み、秋頃から赤く(種類によっては白色、黄色に)熟す。

橢円形で、大きさは2cmほど。11月~翌年5月頃まで付いている。

日本海側産の小型の変種ヒメアオキのほか、果実の色、斑入りなど園芸品種も多い。

ヒメアオキ

葉の形は長橢円形で、葉の縁には粗い鋸歯がある。

雌雄異株。花期は3~5月で、小さい褐色の花をつける。

果実は卵形の液果で、種子を1個含み、秋頃から赤く熟し、翌年の開花の頃までついている。

東北日本海側のコナラ林において、常緑低木ヒメアオキの果実の成熟から実生の定着までの繁殖過程とそれに対する三つの生物間相互作用の影響を調べ、虫えい形成者による散布前捕食の相対的な重要性について評価した。0.25 ha の調査区内のすべての果実を調べたところ、アオキミタマバエの寄生による虫えい形成果の割合が1998年生で57%、1999年生で77%と高い値を示した。虫えい形成果の種子含有率は1~2割であり、散布前捕食が種子生産を大きく減少させていた。一方、健全果は渡り途中のヒヨドリによってごく短期間にほぼ完全に消費され、種子が散布された。野ねずみによる種子の摂食は確認されたが、播種した種子の消失率は1割以下であり、散布後の種子捕食圧は強くなかったと推察される。発芽率は8割以上と高く、実生の生存率も低くなかった。以上のことから、本調査地のヒメアオキ個体群では、虫えい形成者による果実への寄生が実生更新の重大な阻害要因であることが示唆される。(北海道・日本海側の多雪地ヒメアオキと虫えい形成)

(5) 参道石段と本堂

105段ほどの階段の途中に、十三夜塔、庚申塔など、古い石塔が並びます。



(6) 定正院の桜、四景 (春日の勝手な名前付けです)



第一景は、池の南側

写真の右側に南蛮山、金倉山が
見えます。

第三景は、桜、杉の背景に
吉澤家のお墓。

第二景は、池の周り

第四景は、墓地奥のヤマザクラと
背景に日本庭園の桜。

2. 定正院近くの東大新江用水碑 (六日市、十日町、高畠、栖吉地域を流れる、江戸末期開鑿の用水)

(1) 用水の概要

http://www.pref.niigata.lg.jp/nagaoka_nourin/1328475656446.html

江戸時代末期、信濃川に近い村々では福島江の完成により、水不足に悩まされることが無くなっていましたが、一方で東山沿いの六日市、十日町、上組（摺田屋周辺）、山通の村々では水田に水を引くには、山からの出水のみで水不足に苦慮していました。

嘉永2年（1849）、栖吉村の庄屋である佐々木要吉は、この状況を改善しようと、長岡藩に願い出て、多くの農民の力を借りて総延長約12km（信濃川妙見地先から長倉地先の栖吉川まで）の水路開削を試みました。工事は2年後に終わりましたが、堤防が壊れるなどしたため、安政3年（1856）から再び工事を開始し、約900ha（ヘクタール）の水田を潤す東大新江用水路が完成しました。この水路は、福島江の東側に位置したので東大新江と名付けられました。

その後、摺田屋周辺で耕地整理が進み、水を供給し始めると、下流では水不足が生じ、取水箇所の掘り下げや堆積土砂の除去作業が繰り返されました。

昭和13年（1938）4月下旬、雪解けの増水によって信濃川の河床が洗い流され、川からの取水がますます不安定な状態となりました。そこで、東大新江普通水利組合を組織し、新たな用水路工事を計画しました。当時の取水施設を廃止して、新たに信濃川上流の長岡市浄水場付近に取水樋管を設け、国道や上越線のほか、山の下をくぐり抜ける延長約830mの隧道（水路トンネル）を建設し、これまでの東大新江水路と接続するほか、その下流約950mを浚渫する工事を実施し、昭和17年（1942）に完了しました。

しかし、東大新江用水路は依然として取水が困難な状況が続き、昭和27年（1952）、福島江と取水口をいつしょにする信濃川右岸用水改良事業に着手し、新たな取水口はさらに上流に移されました。

また、東大新江用水が流れる東山地域の排水は、当時、太田川、柿川、栖吉川を通じて信濃川に排水されていましたが、地区内の排水路が小さく、狭かったことから、水田に湛水が生じるなど排水にも苦慮していました。このことから、昭和32年（1957）から昭和44年（1969）にかけて県営かんがい排水事業上古志郷地区として、浄土川や周辺の排水路を整備するとともに、太田川から栖吉川までの約4,600mの東大新江用水を山地排水路として改修しました。

現在、この600haを潤す用水路も老朽化し始めたことから、平成7年（1995）から県営事業で延長約10.8kmの改修をしています。

(2) 東新渠紀功碑 (東大新江紀功碑)



お福酒造の南側で、村松への道路を横断します。下流は、国道17号・長倉インター・チェンジの北で栖吉側に合流します。

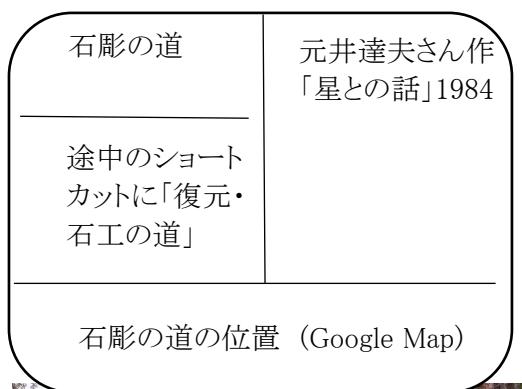
この紀功碑のあるところから、太田川の土手が見えます。東大新江は、サイフォンで交叉します。福島江も、この数百メートル下流のところでサイフォンで交叉しています。

碑文の撰文、書は、高橋翠村（翠邨）明治から大正期に新潟県の中越で活動した漢学者、教育家、書家。
碑文書家としては、他に
令終会碑
星野嘉保子碑など

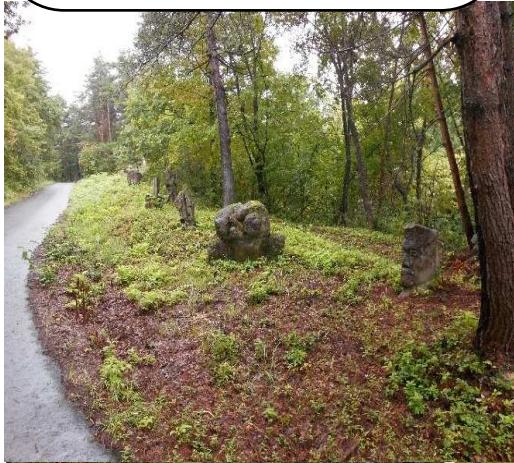
東新渠紀功碑 の訓読全文 掲載予定

参考 釜沢の「石彫の道」

(1) 釜沢の「石彫の道」



定正院近くの横枕を出発点とし、石彫の道、南蛮山を通って、竹の高地から蓬平を終着点とするコースが、総距離12キロほどの自然歩道になっており、「中部北陸自然歩道」のひとつに登録されています。





元井達夫さんは、長岡赤十字病院の近くの信濃川土手にある三島億二郎碑の製作者です。元井達夫さんのらの長岡美術家協会・彫塑部門のグループは、多くのモニュメントを作っています。

ハイブ長岡前の「米百俵の群像」、長岡駅東口のシンボルロードにある、摂田屋出身の童画作家である川上四郎氏の作品をモチーフにした、彫刻7体、大手通りの多くのブロンズ像、みな、このグループの作家さんの製作です。

この中の最年長の元井達夫さんは、2019年、お亡くなりになりました。

多くのモニュメントを長岡に残して下さった先生に、つつしんで哀悼の意を表したいと思います。

(2) 「復元・石工の道」と悠久山の「石工の道」

悠久山公園の中央広場から鶴殿団次郎(*)の石碑に進む途中に石畳の道があり、「石工の道」を模したものと言われています。

その本家本元、発祥の「復元・石工の道」が、定正院の奥、南蛮山の方向に2キロほどのところにあります。 つづら折りの道が続くようになって、道路沿いに石彫が現われ、数百メートル続きます。「石工の道」は、その「石彫の道」の一番終わりの方にあり、つづら折りの道をショートカットした、短い坂道を作られています。 そのちょうど登り口の方に、元井達夫さんの作品「星との話」が建てられています。

悠久山の鶴殿団次郎の石碑の撰文は、石碑の右半分が日本海軍生みの親の勝海舟、左半分が初代連合艦隊司令長官(日清戦争黄海海戦時)の伊東祐亭のもので、団次郎がただものではないことがわかります。

ちなみに、東郷平八郎は3、4代、山本五十六は、26、27代の連合艦隊司令長官です。